

## 東欧の子どもたちと幼児教育(4)

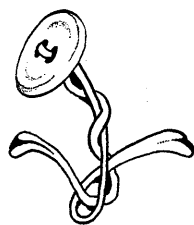
# 家族を描く

—ブルガリアの子どもたちの絵—

杉本 裕子

本誌の五月号で紹介しました、ブルガリアの  
ディミトロフ教授(ソフィア大学)の論文から、  
今回は家族を描いた子どもたちの絵に言及してい  
るところの一部分をご紹介します。この研究は、

現代ブルガリアの家庭における子どもと親との間  
のコミュニケーションの輪郭を、子ども(二三歳か  
ら十二歳)の描画に見られる表現から描きだそう  
と試みたものです。



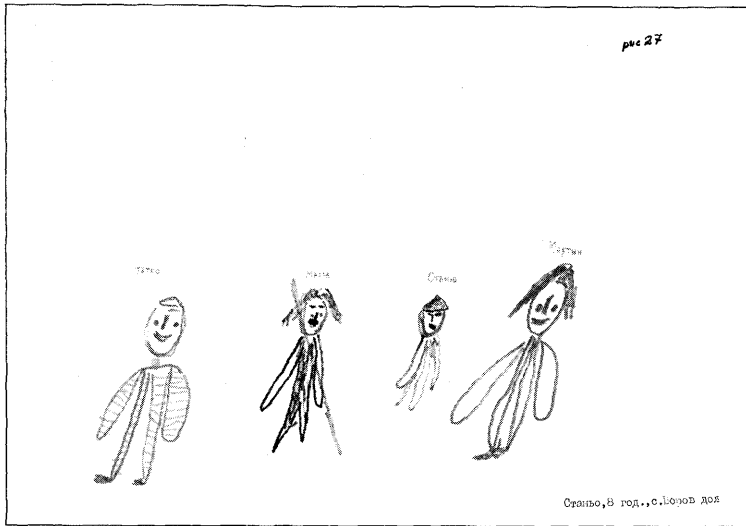
\*

子どもたちは絵の中で、細部の描き込みを通して満足感や幸福感を伝えてきます。ご馳走で一杯のテーブル、明るい色で描き込まれた木々や草花、また空を飛ぶ鳥などです。しかしそれだけではなく、子どもたちは様々な表現をしているようです。

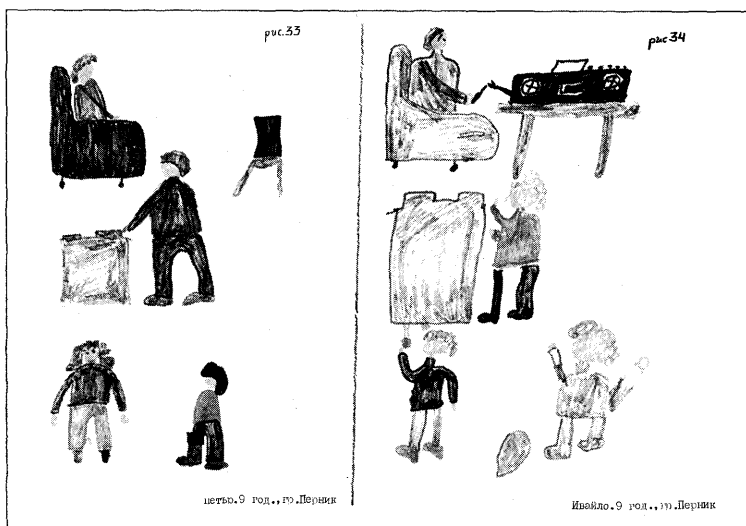
家父長制の流れで、父親が家族の中で強い権力を持っている場合、父親は他の人物より二倍も大きく描かれています(図1)。この絵を描いた子どもは、家庭における父親の権限のない権力に対して、彼女なりに、父親の手指や足を描かないという仕方で気持ちを示しているように思います。

家庭の中で主導権を握るのが母親の場合もあります。子どもにとって、味方である父親が手前に丁寧に描かれ、一方母親の上には斜めの線が引かれていたり、顔が塗りつぶされていたりします





2



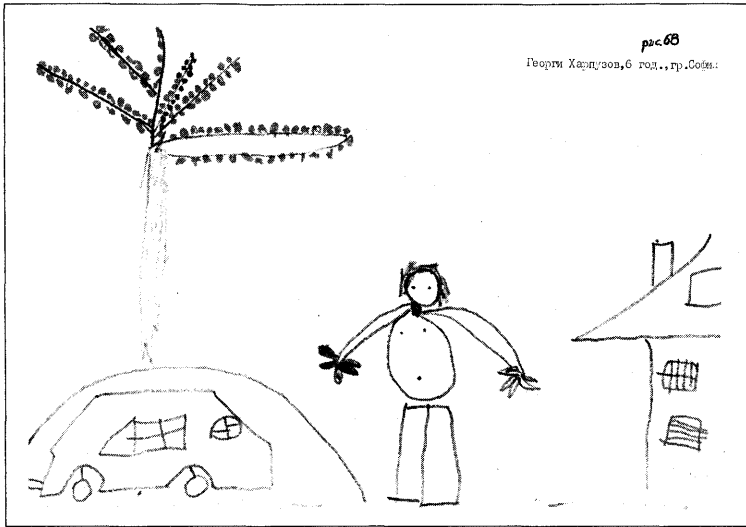
3

(図2)。あるいは父親と子どもは仲良く手をつないで寄り添いながら、母親は絵の中で一番離れて立っていて、しかも口が描かれていないというものもあります。

両親が自分たちの仕事のために家でも忙しくしていて、子どもを顧みないという場合、子どもたちと両親が隔たって描かれています(図3)。そして子ども同士は仲良く親密な様子で手前に描かれています。大人たちの顔には目も口も描かれず、背景に退いています。これはお互いにコミュニケーションをしているのは子ども同士だけ、ということでしょうか。

小学生になると絵の中に家具や家の中のこまごました物を描き込むようになります(図4)。しかしそれらが絵の大部分を縮めていたり、人物の配置の上で重要な役を果たしているような場合、それはむしろ家族の間での親密な関係に欠けてい

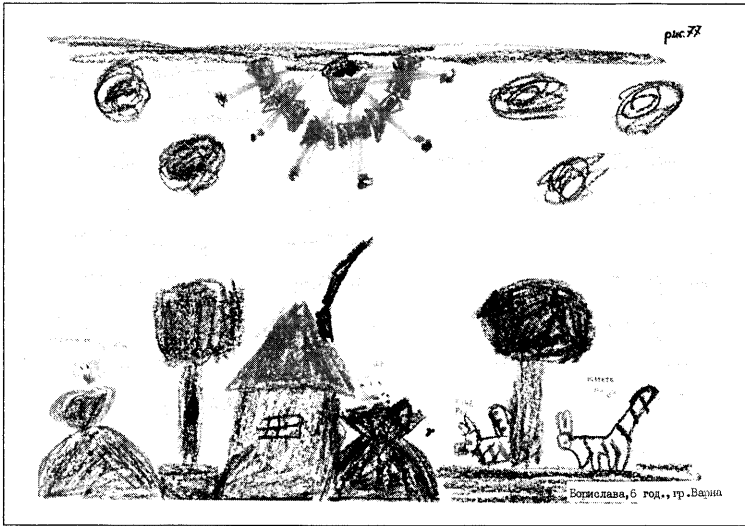




ることを表しているかもしれませんが。

自分の兄弟、姉妹を意図的に描かないことがあります。両親の愛情を独占したいという気持ちの現れでしょう。その一方で、家族の絵であるにも関わらず自分一人しか描かないということもあります。自己中心性の現れでしょうか。そこに描かれた自分は、画面の中央で自分の好きな色をまとい、たくさんアクセサリーをつけ、すてきな洋服を着ておしゃれをしています。しかし、子どもが自分は両親と一緒に何かをしたり、おしゃべりを楽しんだりといった経験があまりないと思っっているような場合には、子どもは自分を小さく、また単色で描き、顔や洋服などに細部を描き込みません（図5）。家族の中で自分の存在価値に不安を感じている様子がうかがえます。

家族の絵に家族以外の人物や動物を描き加えることもあります。自分と同年齢の子どもや、想像



上の兄弟などです。この時描き手の子どもは、自分も家族の一員として対等な人間関係の中にいたいのだということをアピールしているようでもあります。小学校の低学年の子どもは、愛情をかけてやれる対象であるベットを描き込むことがあります。本当は自分にこそ愛情をかけてやって欲しいと望んでいるに違いないのですが(図6)。

(私訳による要約)

(保育研究グループはるにれ)